

春季大会発表要旨

第一会場（101教室）

個人発表

北原白秋の翻訳童謡における

ナンセンスとユーモア

ナーヘド アルメリ

大正時代は童謡の生成期であった。本発表では、とりわけ童謡詩人として最も活躍した北原白秋に注目する。白秋は、日本で最初の童謡・童謡雑誌であり最も権威があった『赤い鳥』において、創作童謡だけでなく、翻訳童謡も発表した。

白秋を取り上げるうえで、彼の童謡観と対極的立場にあった西條八十は看過できない。当時の両者の創作童謡に対する評価を確認する限り、八十がもたらした西洋趣味的な手法が高く評価されたのに対して、日本のわらべ

唄の再創造を基盤にした白秋の作品は、その単調さからあまり評価されなかった。両者をめぐるこれまでの童謡研究においては、創作童謡が重視され、翻訳童謡についての研究は少ない。しかし、白秋の翻訳童謡は、創作童謡とは異なった性質を持っている。

『赤い鳥』創刊から半年弱たった頃、創作童謡において西洋趣味的な要素や空想に満ちた八十の作品が掲載され続けたことに対して、白秋はそういった八十の童謡作品を批判するとともに外国の童謡を2篇紹介している。その2篇ともが台湾の童謡であり、内容はナンセンスである。さらにその後、もっぱら『マザー・グース』の翻訳を載せている。高尚で優雅な西洋趣味の八十の作品に対して、白秋はあえて西洋の童謡の中でナンセンスやユーモアを多く含むこのイギリスの伝承童謡を紹介したのである。こうしたナンセンスやユーモアは、白秋の創作童謡には基本的に見られない新たな要素であった。

八十の童謡が『赤い鳥』に載らなくなると、

白秋の翻訳童謡も掲載されなくなることにも着目したい。その経緯からも、白秋が翻訳童謡を行った大きな理由は、八十がもたらした西洋のイメージとは異なった自分自身の童謡観を発展させるためであったことがわかる。すなわち白秋の翻訳童謡は、わらべ唄の再創造という彼の童謡観を世界的な視野で拡張するとともに、ナンセンスやユーモアという点から多様性を与える試みであったのである。

漱石の漢詩における「帰臥」というビジョンの展開とその身体

崔 雪 梅

漱石の漢詩作品の中で無題の作品はかなりの多く存在するが、それは主に晩年に偏っている。抒情を核とする漢詩は、地域や時代を問わず、社会性のある詩歌として、それに描かれた人物・地理・建築等の景観が当時の時代相を映し出す。多様な物語を詠った無題の作品群からは、「帰臥」という詩語と、それを表すコンテキストとを拾い上げることができ

る。複数の作品が同じ主題に関する詩語とコンテキストとを反復的に表現することは、詩人が自ら求める作品のモチーフとイメージの構成に深く関わっていると考えることができ

る。このような詩語とコンテキストの作品を考察してみると、「帰臥」を詠う詩作には景情の移り変わりが見え始める。複数の作品をつなぎ合わせることで、テキストは、時間の倒錯・錯綜した地理空間・重層的な文化等の特徴をもつコンテキストの働きかけによって、現在から過去に、または、現実から幻想的空間に組み替わってゆく詩的空間の図式を呈する。これを分析することによって、作品は新たな解釈の可能性が開かれる。多様なテキストに変形されている「帰臥」の物語は、その制作の時系列に従って読む場合、一つの長編詩としてみ直すこともできる。この場合、各首の作品はその全体における断片的でスタティックな場面に当てはまるのである。

本発表では、「帰臥」のコンテキスト一般について考察を行い、時代相を認知するコンテキストの考察により、幻想的・理想的なコンテキストの考察に移り、最後に総括として

無題作に表現された「帰臥」のビジョンを明らかにする。さらに、漢詩という「異文化」的メカニズムが漱石の文学において、どのような力学的性質があるかについて述べようと思う。

絵を掛け替えるということ

——「三四郎」試論——

高槻 侑 吾

漱石の小説が「なぜ読まれてきたのか」という問いに対する一つの答えとして、漱石の小説が多様な〈読み〉の可能性を内包していることが挙げられよう。例えば、テキストを可能な限り開かれたものとして読み解こうとする方向がある一方で、テキストの未確定要素を確定させることで新たな〈読み〉の可能性を切り開くこともできる。本発表では、後者の視点から「三四郎」（東京（大阪）朝日新聞「明治四一年九月一日—二月二九日」）に登場する《ヴェラスケスの模写》のモデルを確定させたいうえで、小説の新たな〈読み〉

の可能性を提出する。

《ヴェラスケスの模写》は、《長い間外国を旅行して歩いた兄妹の画》《深見先生の遺画》とともに「丹青会」の描写に登場し、画家・原口が描く美禰子の肖像画《森の女》との掛け替えが予告される。「丹青会」は実際の太平洋画会第六回展覧会を意識したものであるため、各作品のモデルの検討が先学諸氏によって行われてきたが、《ヴェラスケスの模写》については確定に至らず、様々な可能性が提出されるにとどまっている。しかし、当該展覧会の目録によれば、吉田博がヴェラスケスの《メニッポス》を模写した作品が出品されており、モデルの確定は可能である。

《ヴェラスケスの模写》のモデルが確定したとき、小説の新たな〈読み〉の可能性が浮上する。メニッポスは古代ギリシアの犬儒派哲学者、風刺家である。そうしたメニッポスの肖像は「三四郎」の広田先生を髣髴とさせる。広田先生は与次郎から「哲学者」と呼ばれ、日露戦争後の日本を見て「亡びるね」と痛烈に批判する。さらに、《ヴェラスケスの模写》が「一面に黒いことは、与次郎が広田先生を論じた論文「偉大なる暗闇」を想起

させる。

以上のように、《ヴェラスケスの模写》と広田先生を結び付けて小説を読み直すことで、小説末尾における《森の女》と《ヴェラスケスの模写》の掛け替えが意味するところを検討してみたい。

夏目漱石『それから』における

男同士の絆

——「自然の愛」という名の復讐

齊 金 英

イヴ・K・セジウィックは（ジラルルのな）「三角形を構成するのはほぼ例外なく、一人の女性をめぐるふたりの男性の競争である」ことから、ジラルルが「最も精力的に暴き出したのは男同士の絆」だと述べている。つまり、男同士のホモソーシャルな絆には女性を通じたその絆を強める欲望が内包されている一方で、同じ女性をめぐる互いの欲望を模倣し合いながら奪い合うという、ジラルルの三角形的欲望も付随している。

夏目漱石の『それから』では、代助が自分に嫁いでも同然の三千代を迷わずに友人平岡との結婚に「周旋」した。だが、新橋駅で平岡夫婦を見送った後から、親友平岡を憎らしく思うようになった。この新橋的一幕を「それから」以前と以後の境目と設定する。

この「それから」前後に展開した代助と二人の親友との間の関係性を、三千代という女性との関係も介在させながら分析してみたい。そこで、語りの審級で解明されていないいくつかの謎が問題化される。まず、代助と菅沼兄と三千代の丸い円になりかけた「巴」は、なぜ菅沼兄の死によりあつてなく崩壊してしまったのだろうか。また、そのなりかけた「丸い円」は何を意味しているだろうか。菅沼兄が明かしていない「一種の意味」とは何だろうか。そして、代助が覚えている不安の正体は何だろうか。代助が自らデザインした「模様画」に彼のどんな潜在意識が投影されているだろうか。

代助の表層意識を代弁する語りでは、三千代への「自然の愛」に従い、無責任な夫平岡から気の毒な妻三千代を奪い取ることが〈大義名分〉とされている。しかし、実際、三千

代は救われるわけではない。上記の謎に肉薄していくことを通して、そこに潜んでいる代助と男同士のホモソーシャルな欲望の果ての「復讐」劇が浮き彫りにされるだろう。

宮崎駿になった夏目漱石

——時代・ジャンルを超える「草枕」

DNA

跡 上 史 郎

【問題設定】宮崎駿は『腰ぬけ愛国談義』（文藝春秋、二〇一三・八）において、次のように言っている。「ぼく、『草枕』が大好きで、（中略）どこからでも読めるところも好きなんです」。宮崎はもともと児童文学や絵本方面への関心が高く、漱石について語る人物ではなかった。なぜこのような事態が生じたのだろうか。

【事実関係】スタジオジブリの公式サイトによれば、宮崎駿が「夏目漱石全集を読みふけ」ったのは『ハウルの動く城』（二〇〇四）の制作後である。また、『草枕』中のオフエ

リヤに「興味をもった宮崎監督は、実際に訪英し、この絵を目の当たりに」し、CG時代における手描きへの回帰を決意する。また、二〇一〇年には「草枕」の舞台となった熊本を訪れる。その影響は、『風立ちぬ』(二〇一三)にまで及ぶ。その他の発言からも、宮崎駿の漱石、「草枕」への関心は本格的なものと言うことができるだろう。

【仮説】宮崎駿が漱石に関心を抱いた時期が『ハウル』の後だったことにヒントが隠されているはずだ。彼の営為は、『天空の城ラピュタ』(一九八六)のようなパターン通りの冒険譚から、『千と千尋の神隠し』(二〇〇一)のような先の展開の読めない「定形外し」への変貌の旅と言える。それが、国民作家としてのメジャー性とともに、海外での高い評価へと直結している。その理想形は、まさに「草枕」のような「どこからでも読める」テクストだったのではないだろうか。宮崎駿が漱石に出会うためには、『ハウル』までの定形から外れるための旅が必要だったのであり、宮崎駿というフィルタを通して「草枕」の世界の価値が鮮明になるはずだ。

【予想される結論】恐竜が鳥に姿を変えて生

き続けているように、夏目漱石は宮崎駿に姿を変えて生き続けている。そこにあるのは「草枕」において最もよく発現している、定形外の遺伝子なのだ。それが、宮崎駿を「草枕」に正しく出会させたのである。

第二会場 (102教室)

個人発表

炭鋲の連帯

——『戦旗』におけるコラージュの表現から——

奥村華子

本発表では、全日本無産者芸術連盟機関誌『戦旗』から炭鋲労働に関する言説を取り上げ、同雑誌の視覚的表現とくにコラージュを用いた記事の特性を導き、考察を行う。

『戦旗』(一九二八年五月〜一九三一年十二月)は、当初「プロレタリア芸術各部門の総合的報道者」と目された。一九二八年十二月

ナツプ臨時大会での決定により、連盟は全日本無産者芸術団体協議会へ、従来ナツプ内に包括されていたセクションは各々独立した芸術団体へ分化する。しかし、広く無産者芸術の結集を掲げていた同雑誌は、文学の発表媒体としてだけでなく、演劇、美術の紹介、漫画やグラフィ記事の掲載、武術やポスター制作の実践的指南と、総合的な芸術・文化雑誌としての性格を持っていた。このような多面的性質の中で、グラフィ記事に用いられたコラージュは、異なる要素を寄せ集め、世界の状況や労働者の姿を視覚的かつ複合的に提示し、雑誌読者に共同体の連帯を示す効果を果たした。コラージュという技法の特性を頼りとし、

「二つの行列(一九二九年三月号)を中心に、分析を試みる。この詩では、坑内で起きた炭車転倒による青年の死を起点に、その遺体を運ぶ行列を俯瞰する語りの中で、三・一五事件の様子やロシアへの呼びかけ、昭和天皇の即位を祝う群衆の姿が挿入される。複合的な要素と組み合わせられながら提示される炭鋲労働者の姿をどのように捉えうるか、その他の言説を踏まえつつ、考察を行う。

従来のプロレタリア文学研究において、炭

鉱労働を描いたテクストは分析のための粗上
にあげられてきていない。都市工場労働者や
農民に基礎を置く組織編成にあつて、炭鉱勞
働者は周縁化されていたという前提を、研究
史も踏襲していたのである。具体的な表象分
析から、このような現状を再考し、プロレタ
リア文学における炭鉱労働という論点を導出
することを本発表の目的とする。

坂口安吾「ラムネ氏のこと」の 史的位 置

—— 幸田露伴「文明の庫」、森鷗外「サ
フラン」との対比から ——

吉 田 大 輔

本発表では、坂口安吾（一九〇六一—一九五
五）の「ラムネ氏のこと」（『都新聞』、一九四二）
を取り上げ、そこに述べられている事物の起
源・名詞への態度を史的に位置づけようと試
みる。議論に際しては、作家論的考察を行う
ことや同時代状況に接続させた解釈を行うこ
とよりも、先行する他作家の文章との対比か

らその特徴を考察することに力点を置く。

「ラムネ氏のこと」の内容に強い近似が見
られ、かつ、これに先行する文章として、幸
田露伴（一八六七—一九四七）の少年文学「文
明の庫」（二八九八）を重視したい。安吾「ラ
ムネ氏のこと」と露伴「文明の庫」は、身
周りの事物の起源をもとに主題とし、それら
を考え出した人間の創造的営為を歴史の連
続の中に見出そうとする姿勢が共通する。だ
が、このような近似が見られるということの
裏を返せば、両者の差異も併読から浮き彫り
になるということでもあり、特に固有名を
めぐる態度には、大きな差異が確認できる。直
接の影響関係を立証することは難しいもの
の、先行する露伴「文明の庫」を補助線とし
て用い、事物の起源や名詞への態度を対比的
に考察するとき、安吾「ラムネ氏のこと」の
史的位 置はより鮮明になるだろう。

ついで、森鷗外（一八六二—一九二二）の
「サフラン」（一九一四）との対比も試みたい。
サフランという名詞との出会いがサフランと
いう事物そのものとの出会いに先行すること
を書いた鷗外のこの文章も、安吾「ラムネ氏
のこと」と直接の影響関係が指摘できるわけ

ではない。だが、そこで述べられる名詞を
めぐる態度もまた、「ラムネ氏のこと」と好対
照をなしており、この文章も参照することで、
安吾「ラムネ氏のこと」の独自性はより明確
になる。

以上のように、先行する露伴、鷗外の文章
と安吾「ラムネ氏のこと」を対比的に分析す
る作業を通じて、「ラムネ氏のこと」という
小品は安吾独特の名詞論ならびに起源論とし
て成立していると位置づけてみたい。

パネル発表

女同志の絆の生成と分断そして再生

——明治から戦後にかけて

山田 順子・菊地 優美
・芳賀 祥子
・レティツィア グアリーニ
(デイスカッサント) 久米 依子

範や社会との関わりの中で、様々な分断・亀裂が生じており、いまだ統一的な見解は得られていない。

本パネルは、明治期から戦後にかけての「女同志の多様な絆」について、小説テクストや雑誌メディアなど複数の媒体を通して可視化することを試みるものである。イヴ・K・セジウィック『男同志の絆』によって、男同志のホモソーシャルな絆の機構は明らかにされた。一方、女性同志の絆は、「シスターフッド」¹⁾、「レズビアン連続体」(アドリエンス・リッチ)²⁾、「女同志の絆」³⁾、「女のホモソーシャルな欲望」(竹村和子)⁴⁾、「女性のホモソーシャルティ」(東園子)⁵⁾など説明する言葉は複数存在するが、ジェンダー／セクシュアリティ規

セジウィックによれば女性同志の絆は「ホモソーシャル／ホモセクシュアル」という二項対立的なものではなく、明瞭に連動しているという。これを踏まえ、竹村は具体的な状況が生み出す情緒的な絆を「開かれた連帯」と名付け、目の前の目的を共有するときに訪れる、きわめて個別的で私的な出来事であると説明する。「ソーシャル」という語から、社会制度という含意を抜き去り、「今、共にいること」という本来の意味だけを取り出せば、女の絆はまさにホモソーシャルであり、それを支えているのは、「欲望」という強烈な内的親和力(エロス)である。制度にとっては最も「語りえぬもの」、危険なもの、女たちにとってさえ、内部抑圧を避けて保持し続けることが難しい経験であるという。これに対し、東は女性にとって男同志の絆と同じ様な女同志のホモソーシャルな絆が表象・経験・観念の上でほとんど存在していないと指摘した上で、その理由について、女性のホモソーシャルティは、社会の中で公的な性質が

あるとは認められず、私的領域に位置づけられた上で異性愛と競合関係に陥り、親密性の中で周縁化されるためであるという。そこで性的な関係と分析的に区別された、非性的と認識される同性間の関係性を指す概念が必要であるとし、「女性のホモソーシャルティ」を立ち上げている。非性的な関係と規定した点において、東と竹村の見解は明確に異なる。

明治末に出現した「エス」のような少女同志の関係は、当初は異性愛制度に抵触しないとみなされていた(久米依子)。しかし、一九一〇年代のハヴロック・エリスの性科学の影響などにより、女性同性愛は異常と名指され、病理化され、親密性の領域において明確に印づけられるようになる。さらに戦後の日本においては、女性同志の関係が時代遅れの不健全なものと目され、少女雑誌では一九五〇年代半ばに少女間の思慕が扱われることが減少し、代わって男女交際が推奨されるようになったという(今田絵里香)。

こうした議論を踏まえ、本発表では小説テクストや雑誌メディアなど様々な媒体を通して描かれ、結ばれる女性同志の絆を分析し、それらがどのようなあわいに出現するのか、

その形式と内実を検証する。

まず山田順子は吉屋信子『花物語』と発表媒体であった『少女画報』、『少女倶楽部』を取り上げる。『花物語』において、少女同士の同性愛描写に「創世記」が使用されている点に着目し、少女文化と〈キリスト教〉の関係性について検証する。次に菊地優美は、野溝七生子作品を検討し、『山樞』に始まり、『寒い家』『往來』、『女獣心理』、『神聖受胎』『沙子女死す』に至る女同士の絆を描く一連の作品群を考察する。それらの絆が家族と密接に関わりながら描かれ、最終的に〈母〉を絆を結ぶ相手としていく点に注目しつつ、野溝作品における女同士の絆の内実とその系譜を明らかにする。そして、芳賀祥子は、昭和初期から戦後までの『主婦之友』の創作欄と読者欄を対象に、〈主婦〉の、「創作」を通じた連帯の可能性と、テクストの中の具体的な絆の表象を検証する。特に、少女雑誌から活躍の場を移した吉屋信子、看板作家として最も長い連載期間を持っている獅子文六の作品を中心に、家族制度と異性愛主義の中、〈少女〉とはまた異なる分断におかれている〈主婦〉にとつての紐帯を考える。最後にレティツィア・

グアリーニは、『聖少女』を中心に倉橋由美子文学における少女同士の絆について論じる。作者が「最後の少女小説」と称した本作品の分析をもって、戦後におけるセクシュアリティ、とりわけ純潔教育を踏まえながら「少女小説」と「少女同士の絆」との関係を検証する。以上のパネル報告を踏まえ、久米依子氏をデイスカッサントに迎え、会場を交えた討議を行う。東と竹村の見解の相違も含め、女性同士の多様な関係性や紐帯のあり方について、今後の研究の方向性や課題を浮上させる意見交換の場としたい。

第三会場（103教室）

個人発表

自己言及するテクストとしての『俘虜記』

峰 尾 俊 彦

『俘虜記』（合本版一九五二年）は、太平洋戦争末期のフィリピンにおける大岡昇平（一九〇九年～一九八八年）の捕虜体験を描いた短編連作である。特に大岡が捕虜になるまでを描いた「捉まるまで」（一九四八年）は、大岡と重なる「私」がアメリカ兵を撃たなかったことの自己分析をする場面が多く論じられてきた。ここには「戦場における私」「書いている現在の私」という時間的距離を利用した自己言及の構造を見出すことができる。しかし、テクストの自己言及性はこのような物語内容レベルにとどまらない。『俘虜記』では別のレベルにおいても自己言及がなされるのだ。例えば「もし私が小説家であれば、

種々の事件を設けることによって人物を躍動せしめることが出来るであろう。しかし、俘虜の間には行爲がないに従つて、本質的な意味での「事件」というものもない。俘虜の小説の事件は尽く作りものか誇張である」（『労働』）という一節があるように、『俘虜記』の連作においては、『俘虜記』として線的に書かれるテキストにおいてこのテキストがいかに書かれるべきか、という間が問われている。すなわち「戦場における私」―「書いている現在の私」という時間構造を利用した自己言及のみならず、『俘虜記』が現在進行形で書かれる中で「すでに書かれた物語言説」―「今書かれつつある物語言説」という時間構造によつても自己言及がなされていくのである。

本発表では『俘虜記』を「小説」批判のモチーフを持つ作品として定位しながら、「なぜ撃たなかつたのか」という自己分析の場面をはじめとし、テキスト内部で書かれた物語言説が自己言及的に語られる部分を分析する。それにより「なぜ撃たなかつたのか」という間の意義を新たに定式化していく。さらに、この自己言及的な「語り」が『俘虜記』というテキストを大岡がいかなるものとして提示しようとしたかを示していきたい。

井上靖「西域物」における水・河 ——「楼蘭」と「洪水」を中心に——

劉 東 波

井上靖の多くの「西域物」には水の要素が含まれている。初期の「西域物」から、水は既に描かれている。小説「漆胡樽」では、漆胡樽という西域から伝来した巨大な器物が古代西域人の生活の器具と想定され、その流転が描かれている。その次に発表された小説「玉碗記」における玉碗は、安閑天皇陵付近で起こった洪水の影響で皇陵から流され、西琳寺に寄付されたという。さらに、正倉院の白瑠璃碗と再会し、そのロマンが描かれている。井上靖の「西域物」で、水・河が本格的に登場する作品は「楼蘭」と「洪水」がある。「楼蘭」では、タクラマカン沙漠に囲まれている西域の国・楼蘭（後に鄯善と改称）の盛衰及び集落の移動が語られている。「楼蘭」では、ロプ湖の移動が鄯善の盛衰と繋がっている。

また、西域の異民族の人たちの生存を支配している河竜という水の神も描かれている。これらの作品で、沙漠は西域の孤独、絶望を象徴し、「上に飛鳥なく、下に走獣なし」の異域の世界が描かれている。一方、水・河は、西域の夢、希望などを象徴し、謎、未知が詰め込まれている新しい世界が描かれている。二十世紀の初頭、「敦煌文書」の発見により、敦煌・莫高窟は世界中の注目を集めた。多くの国の探検隊が西域へ向かった。「敦煌学」という新しい学問分野も誕生した。井上の時代は、ちょうど敦煌モードの時代であった。「敦煌学」の発展の影響を受け、自らの学生時代から持っていた西域への憧れを文学化した。特に、『敦煌』と「楼蘭」の発表により日本中を魅了した。

井上靖の「西域物」における水・河は、作品でどのような役割を担っているのか。井上靖に対して、水・河はどのような存在なのかなどの疑問に関して、まだ研究の余地がある。本発表では、典拠と指摘されている『漢書』、『後漢書』、『水経注』、『大唐西域記』などの史料と本文の比較研究を行いながら、井上靖「西域物」における水・河の意味を考察する。

パネル発表

『1946・文学的考察』における「世界文学」のプログラム

岩津 航・戸塚 学・西岡 亜紀
(デイスカッサント) 井上 隆史

近年、モレットイやダムロッシュが提起した「世界文学」概念が比較文学研究や外国文学研究の中で盛んに議論されている。こうした議論は文学研究が事実上各国文学研究になつている現状や欧米文学中心主義に対するアンチテーゼとして持ち上がったものだが、日本でも「世界文学」概念が盛んに議論された時代があった。それは敗戦直後から五十年代にかけての時期であり、こうした議論の一つの契機となつたのが『1946・文学的考察』(真善美社、一九四七)である。本発表は、『1946・文学的考察』の分析を軸に据え、戦後における「世界文学」概念やその時代的な波及について考察することを目的とするものである。

『1946・文学的考察』は、加藤周一、中村真一郎、福永武彦の三名の共著として刊行された。共著者三名が焦点・時間・空間の三つの視座を交代で受け持ちつつ、文学の諸問題を論じた時評的エッセイで、前半部は雑誌「世代」に「カメラ・アイズ」と題して連載された。戦前の高等教育における教養主義の色合いが濃い本書の言説は、戦争体験の総括や敗戦後の生の現実との対面が焦点化された他の戦後文学の文脈とのずれ、各種戦後文学史でも時代との乖離が指摘されることが多い。しかし一方で本書は、戦前の旧制高校や帝国大学で彼らの言説を作り出した教育、読書傾向、先行作品、共通体験などの時代的な現実をよく映し出しており、それらが戦後の日本文学にどう架橋されたのか、さらにそれが戦後の加藤・中村・福永の作品においていかなる展開を見せたのかを知る上で重要な鍵となる作品である。刊行から七十年という節目に、彼らや戦後文学者が夢見た「世界文学」と現状の「世界文学」概念の対比を行うという意味でも、現状ではその内実が的確に受け取られてはいない本書を読み直すことには意義があると考えられる。

パネル発表では、発表者三名がそれぞれ加藤、中村、福永三名のテキストを担当する。本書のなかで三者が「世界文学」を説明するために設定した観点や「世界文学」への解釈を抽出し、彼らが文学者としての出発点で夢見た「世界文学」概念について整理する。またその文学観が、その後の彼らの実作にどう展開したのかを考察する。デイスカッサントの井上隆史は、三島由紀夫や野間宏といった、三者との同時代的な文脈を共有しつつも、彼らとは異なる文学的視座を提供した文学者の仕事や彼らの「世界文学」概念との関わりを提示することによって、本パネル発表の議論を相対化する。

具体的に、岩津は、「新しき星董派に就いて」[或る時一冊の亡命詩集の餘白に]「一九四五年のウエルギリウス」「焼跡の美學」「我々も亦、我々のマンドリンを持つてゐる」[金槐集に就いて]「知識人の任務」[オルダス・ハックスリの回心]「寓話的精神」の内容と文脈を分析し、加藤が夢見た「文学の革命」の真相を考察する。加藤にとつて、戦時期との政治的決別と文学的決別は、第一に、理性と人間性の復権を意味し、第二に、民主主義實現

のための具体的な行動を伴うべきものだった。加藤は「世界文学」の標準を、論理的で知的なレトリックに満ちた中国古典とロマン主義以前のヨーロッパ近代に定める一方、個人主義的で感情的な日本文学を批判した。

と僕たちの地獄」「二つの現実」「二人の復員兵」「ポオドレエルの人生」「作家と行動」「ジャン・ポオル・サルトルとジョン・ドス・パス」「オイヂプスの運命」「人間の発見」の内容と文脈を分析する。福永が「世界文学」として意識したのは、主にヨーロッパ近代文学の諸相である。それに通じる「新しい文学の出發」として、文学的な現実、小説としての虚構、普遍的な人間などの問題を提起した。

戸塚は、「ペトロニウスの饗宴」「田舎からメムノン」と共に「或る女友達の疑問」「ラニイ・バッド」「七十歳の論理」「日本に於けるヘルマン・ヘッセ」の内容及び文脈を分析するとともに、それらと時代状況の関連、中村の二十世紀西欧文学論や王朝文学論及び同

後、福永の「ロマン」構築にどう展開したかを考察する。

『1946・文学的考察』の時点では文壇における「日本文学の世界文学への道」といった議論には距離を置いていること、具体的には日本の王朝文学を中心とする古典に着目することで彼なりの「世界文学」への提言を行うおうとしていたことを明らかにするつもりである。

西岡は、「文学の交流」「ダンテの『地獄』

第四会場（109教室）

個人発表

知的共同体としての「珍書屋」

——昭和初期の出版史の〈外部〉に着目して

大尾 侑子

かつて丸山眞男は「現代日本の知識人」のなかで、「知識人が職場の違いをこえてひとつの知的共同体を構成している」という意識が近代日本では成熟を妨げられてきた」としながらも、こうした意識が比較的高まった三つの時期を示している。第一に、「アウトサイダーの知識人」を主たる担い手として近代文学や近代芸術が発展した明治維新から明治二〇年、第二にマルクス主義が「知識人」としての共通の基盤と役割を自覚させた一九二〇年代から三〇年代にかけて、そして知識人に自己批判の精神が芽生え「悔恨共同体」が形成された敗戦直後である。

この議論を受けて本発表では、第二期に於ける昭和初期に登場した「珍書屋」と呼ばれる職能集団の再考を試みる。珍書屋とは、「非合法、或いは非合法的エロ出版」を扱う出版屋を指し、一般の書店に出回る書物とは異なる「珍書、稀書、或ひは艶本、エロ本」を流通させ、検閲下において読者の特殊なニーズを満たした(志摩房之助「最近軟派出版史」談奇党一九三二年 第三号 一〇)。同時代には、

「珍書屋と云はれる程の者であれば、多少の文筆的素養と、ジャアナリステイックな頭脳の働きと、相当の度胸と、機敏な活動力とを具備してゐなければ出来るものではない」と評されたように、彼らは執筆から編集、印刷、製本、宣伝も含めて全てを一手に担い、うる教養を備えていたと考えられる。さらに珍書屋は、ブローカーを介在させた会員制頒布という流通手法により、全国の読者に「珍書」というモノを媒介とした共同体意識(同好の士のアイデンティティ)を芽生えさせた。

本発表では、従来の出版史が看過してきた出版流通の〈外部〉である珍書屋と、彼らが可能にした同好の士のネットワークを「知的共同体」(丸山眞男)として再評価することで、

昭和初期の出版流通史に新たな視点を提示するとともに、当時の「知識人」の多様性について問題提起したい。

日本の少年犯罪小説研究

——少年法制定以降の変化を中心に

南 相 瑠

本発表は、少年犯罪という社会的現象を題材とした小説を対象に、その特性と変遷過程を通時的に明らかにすることを目的とする。

具体的には、一九四八年に日本で少年法が制定されて以降、少年犯罪を取り巻く社会環境が変化していくなかで、文学作品がそれに対応してどのように応答し、いかなる変遷を辿っていったのかを分析し、小説の中に現れる社会問題にも注目しながら、社会と小説の相関性を明らかにしていく。

それにあたって、本発表では「少年犯罪小説」を「一四歳から一九歳までの少年による殺人及び他人の死への好奇心を描いた小説」と定義し、それに基づいて、一九四八年から

現在までに発表された一九三作品を対象に、その時代ごとの特徴と変化を考察する。

さらに、本発表は、①一九四八年から一九八〇年、②一九八〇年から一九九七年、

③一九九七年から現在という三つの時代区分を設定し、そこに見出される社会状況の変化と小説の変化を包括的な視座から検討していく。まず、①一九四八年以降の戦後の混乱期の社会における、貧窮生活に起因した少年犯罪を描いた小説と、②日本の経済的・社会的

な高度成長期に発生した少年犯罪小説をみると、この二つの時期の作品はすべて、少年犯罪の原因を社会に還元し、社会構造の問題を批判する点で共通している。次に、「家庭」や「学校」で問題のない極めて「普通の子」が犯した③一九九七年の神戸連続殺傷事件に目を向けると、少年犯罪の原因が個人の問題として扱われるようになり、それと相即するように小説においても不可解な事件や犯罪に思い悩み、その解決策を模索しようとする作品が増加している。以上を踏まえ、本発表では社会構造の問題を批判した小説から個人的な問題の解決方法を探そうとする小説、読者に少年犯罪について考えさせる小説まで、そ

の変遷を分析し、そこから小説がもつべき姿勢や社会への影響力を考察することで、社会と文学の関係性を明らかにする。

パネル発表

〈差異の政治〉と一九九〇年代

浅野 麗・倉田 容子・富塚 昌輝

・服部 訓和・山根 龍一

(ディスカッサント) 黒岩 裕市

佐々木敦が自身の命名と自称する(「文学」は『文藝』の一时的な猛ブッシュがあったものの、何人かの新しい書き手を世に出したことをのぞき、以後さして継続的に追求されたわけではない。ただ、曖昧なネーミングであっても興味深いと思われるのは、それが八〇年代のなカルチャーの延長線上にある(渋谷系やメデイアミックスと深く関わる場所から登場しながら、同時に、のちの(サブカル)につながる「J回帰」(浅田彰)の端緒にも位置づけられるものだからだ。

体制への批評性を有していたはずのサブカルチャーが、平面化された(日本のサブカル)となる。たとえば大塚英志は、(Mの世代)としての自己を含めた(おたく)の心性を多様性の観点から肯定しつつ、やがて消費者の立場から既得権者としての(純文学)を叩いた。その立場から、多元性や流動性、脱中心化したアイデンティティを肯定する図式には、もしかすると(差異の政治)の系譜が認められるのかもしれない。だが、大塚はかつての主張をすでに撤回している。その背景には(クールジャパン)や(ネットウヨ)が出現する事態があらう。九〇年代後半における新自由主義化と(サブカル)はこのほか親和的だったのだ。

ところで、ここで(差異の政治)が明らかに多くのものをもたらした事実にも触れよう。たとえば、ダナ・ハラウエイがサイボーグの身体を発見して(自然)な身体を脱構築したこと、ジュディス・パトラーがパフォーマティブの概念を駆使してジェンダーにまつわる主体のモデルを攪乱したことである。だが、これらがフレキシビリティを称揚する新自由主義と共犯関係を結ぶ場合があること

も、いまや確かである。こうした見取り図のもと、文学の価値の自明性を再認するのみでなく、(ポスト)という接頭語のもとに多様な差異化を称揚する批評性を言祝ぎもした、バブル後の文学をめぐるありようを見定めた。

浅野は、一九九〇年代前半の笹野頼子の小説を取り上げる。書名のとおり「なにもしてない」(一九九一)、「居場所もなかった」(一九九二)三〇代女性を主人公とするこれらを、(Mの世代)に加えて(昭和の終わり)以後の「首都」をおもな舞台とする歴史性を踏まえて読む。その際、フレキシブルに動くことができる自由の裏面に、動かされることの不自由を張りつかせた言葉の政治性が、「J文学」として再発見されるときにどう読み取られたのかを補助線とする。

倉田は、『ナチュラル・ウーマン』の解釈(共同体)の変遷を辿り、(差異の政治)と新自由主義の結託を指摘する言説に内包されたヘイト・スピーチの構造を指摘しつつ、(差異の政治)とそれへの批判の双方を再検討する。ウォルター・ベン・マイケルズは、アイデンティティを重視する点でジョージ・W・ブッ

シュとジユデイス・パトラーは立場を同じくすると述べたが、本発表では、このように文脈を切斷し、他者の言語を換骨奪胎する、統制的権力を行使する言説の構造をそれ自体を問題化し、抵抗の方途を模索する。

富塚は、「一〇〇年後の読者のための樋口一葉」という特集を組んだ『文藝』の一九九六秋季号（八月発行）を糸口として発表を行う。本号には、蓮實重彦のインタビュー、多和田葉子のエッセイ、松浦理英子・高田雅彦・山本昌代・篠原一による一葉作品の現代語訳等が掲載されている。〈J文学〉の担い手とされた人々が多角的に関与した本特集を取り上げ、樋口一葉の受容という観点から、〈J文学〉の特質について考える。

服部は、中原昌也作品を検討する。「無意味な暴力とセックスに満たされた断片がえんえんと連続するばかり」（浅田彰）とも評される中原の小説を、桂秀実や渡部直己は「ジャンク（J）」として肯定し、高橋源一郎はポストモダン文学の文脈で意味づけた。つまりは中原作品の非物語性は〈差異の政治〉と関連づけて意味づけられてきたと言えるが、ここでは「キャンペーン」（ソング）の一語を手

がかりに、九〇年代・（デス）〈渋谷系〉のコンテクストのなかで、中原作品のわからなさを読み解くことを試みる。

山根は、九〇年代初頭を作中時間とする阿部和重『アメリカの夜』（一九九四）を分析する。当該作は、「彼自身が八〇年代的である」中山唯生とその分身の「私」により、先行諸作が参照されつつ展開する。発表では、「ドン・キホーテ」と『神聖喜劇』に「ひとつの時代」を「切斷」せんとする「凶暴な意志」を見る唯生が、それらとブルース・リー『魂の武器』とを参照して同質の「転回」を試みる帰趨を見極め、作中で表象される「八〇年代」とその「切斷」のありようを検討する。その上で検討結果を歴史化し、八〇年代と九〇年代の断続について考えたい。

以上の報告について、黒岩をデイスカッサントとして、発表者と会場とのあいだで討議を行う。

一〇二一年目の漱石

——なぜ読まれてきたのか

【特集の趣旨】

運営委員会

二〇一六年、夏目漱石没後一〇〇年として、さまざまな企画や出版が相次いだ。これは、漱石が今日においても日本近代文学の強力なコンテンツとなっているということに改めて気づかされる出来事となった。漱石が多くの人々に受容されているという事態に対して、研究はどのような積極的な関係を結べるのか。学会という場において、この問題を議論する意義はあるだろう。

漱石研究では、いわゆる作家作品研究に留まらず作品の精緻な読解をめぐる研究が進められてきた。一九八〇年代半ばには、「こゝろ」の精緻な読み方を競う形で作品論とテクスト論という二つの研究理念の意義が論争的

に議論され、日本近代文学研究の大きな転回点になった。作品論では、作品読解に際して「漱石という作家」や「明治の精神」といった上位概念が参照されるのに対して、テクスト論は作品論が「作品論→作家論→文学史」という階層付けられた理念を前提としていることを批判し、「大きな歴史」観を脱構築することによってテクストの新たな読みを浮上させたのである。さらに、一九九〇年代には、そのテクスト論も、テクスト自体が様々な権力関係によつて産出されていることにより自覚的であろうとする議論によつて批判的乗り越えが目指され、二〇〇〇年代以降の文化研究や、ジェンダー・スタディーズ、ポストコロニアル批評などをとり入れた研究の刷新につながった。

漱石をめぐる議論が時代ごとの研究方法の推移と共にあり、その結果影響力を持つてきたのは、そもそも漱石作品が教科書教材など

の受容を通して広く共有されてきたという下地があるからではないか。その後、学会では「大きな歴史」観の脱構築がさらに進められて分析対象とする作家も方法も多様化したのが、その結果、広く議論を共有できるテーマが予想以上に縮小してしまうこととなった。この機会に漱石をとりあげ、テクストを読むという研究の原点を見詰め直すとともに、作家という指標について再考するための端緒を開きたい。学会という大きな場ならではの企画として、午前中に二つの企画パネルを、午後にシンポジウムを開催する。どのように個別の作品の読みかえができるのか、漱石が商業的な意味でのコンテンツであることに對して研究がどのような関係を結べるのか、教育とどのような関係を結んでいくのかなど、多様な議論を重ねていきたい。

午前・第一企画（パネル）

〈文化〉としての漱石

——作家像・教科書・文学館・サブカル
チャーター

運営委員会

夏目漱石という文学者は、その没後にいっそう存在感を増し、いわば巨大な「文化」の総体として二十一世紀まで継承されてきた。

一般読者に書物として読まれることはもちろん、文壇や学会を中心に学問と知性の象徴として機能する一方、様々な文化領域に転用され、受容されることで、ますます多くの読者を得てきた。またそれらが生み出した読者と研究者のポリウムが、現在の近代文学研究の中心地としての漱石を支えていることもたしかである。

知に惹かれる者たちが必ず通るべき教養として昭和初年代にいわゆる「岩波文化」の象徴となり、以後も多くの文学者の中でひと

わ文化の香りの色濃く漂う存在として遇されてきた漱石。しかし、なぜそれは他ならぬ漱石だったのであろうか。たとえば、戦後の文芸評論や文学研究の分野では漱石をどのように論ずるかが、その論者の思考を表し、また力量を示す試金石であるとともに、その動向が分野全体の様々な領域に決定的な変化をもたらしてきた。また、学校現場において教科書の定番教材として収録され続けることで、

ほぼ全ての「国民」が生育期に漱石作品に親しむとともに、それを通じて人間や社会という問題を考えることを体験してきたという意味でも、漱石が果たしてきた役割は大きい。さらに、ほどなく漱石山房跡地に完成する記念館は、作家個人の顕彰の問題を超えて、資料とともに漱石についての文化的蓄積を後世に引き継いでゆく場として、また社会教育の場としても、重要な意味を持つであろう。

近年は映画やテレビドラマはもちろん、コミックやゲームなど細分化されたサブカルチャーの諸領域やインターネットの中で、漱石というキャラクターやその作家情報が従来立った事態である。

本パネルでは、石崎等氏、武藤清吾氏、中島国彦氏、山田夏樹氏の四名をお招きし、この「文化」としての漱石に纏わる諸相とそのことが持つ意味や、さらにその文化的存在としての今後の継承と活用の可能性を、漱石研究者の立場や国語教育史の立場、漱石山房記念館の創設に関わった立場、サブカルチャー研究の立場などから多角的に検討することを目的とする。

一九九三年の〈漱石〉、その尖端

「国語」教育と「国民」作家漱石

記念館という存在

石崎 等

武藤 清吾

中島 国彦

結社における清規芸術運動における宣言、出版における創刊の辞や刊行目的、展覧会開催の趣旨など、時代を画する言葉が、一人の天才の登場、時代の転換を象徴する一冊の書物、あるいは一つの作品の出現とともに、重要であることは言うまでもない。

私にとって〈漱石〉との付き合いは短くはない。といって、それはことさらに特筆すべきものではない。出会いはどうであり、どのような認識の変化を私にもたらしたか。漱石全集の出現がはらむ研究の諸問題——編集方針や本文の校訂や注解、展覧会の特徴や意義、研究動向などを視野に入れつつ、漱石研究のバラダイム転換をうながした、一九九三年一〇月創刊の『漱石研究』の「刊行のことば」に焦点が当てられることになるだろう。

「国語」教育での漱石像の形成には二つの山があった。一つは、芥川龍之介編『近代日本芸文読本』に漱石はじめ一二〇名の作家が取められ、カノン（正典）となったことである。漱石文学はそれまでの断片収録から西尾実らの編集した教科書に読むテキストとして教材化され、旧制中学校生などの教養実践に位置づけられていった。第二の山は一九六〇年代の「現代国語」教科書に「こころ」の収録が増え、戦後も「国民」作家としての漱石が教養実践の対象となっていくことである。漱石に続く世代は漱石文学に新しい戦争の予感と抵抗を読み、戦後の世代は世界の個人の模索を読んだのである。発表では、沖繩の読み手による「国民」作家漱石受容の問題もあわせて報告する。

志賀直哉は、遺言の中で、自分の名を付した記念館・文学館は建てないように、と書き残した。漱石の場合は、少し複雑だ。晩年の九年間住んだ早稲田南町七番地の場所に、新宿区が漱石の記念施設を計画してからかなりたつが、やっと跡地利用が可能になり区立の「漱石山房記念館」が建設され、生誕一五〇年の今年、九月二十四日に開館する。準備段階から関わりを持った立場から、記念館がかかえる問題を整理したい。地元の人々の憩いの場（無料ゾーンの存在）、漱石に関心を持つ社会人・学生にも十分対応出来る専門的な文学館（展示室や図書室）、小中学生を含めた若い世代に漱石の文学を伝える拠点など、多くの要求がある。書斎の復元により、創作の現場に立ち会えるという魅力もある。さまざまなのが渦巻くのが「文化」の姿なのなら、記念館の将来像はこれからの問題だ。この機会に、多くの方の夢を集約していければと思う。

サブカルチャーと夏目漱石

山田夏樹

が、それだけではなく、今回、夏目漱石の生き様や作品が有する性質が、いかにして現代的な表象と響き合っているのかを改めて検証したい。

午前・第二企画（パネル）

漱石研究の現在

——未成の出版期と〈小説〉への問い

運営委員会

時折起こる日本語ブーム（例えば二〇〇〇年前後）などにおいて、夏目漱石は、名文の担い手としてしばしば召喚される。また、やはり二〇〇〇年代以降に多数出版された、あらずじて読む日本文学、マンガで読む日本文学といったシリーズにおいても、やはり確実に作品化されるのが夏目漱石である。それは裏を返せば、文学的な教養体系がある程度崩壊しきつたことを示すものではないのかもしれない。

しかし近年、そうした流れとは異なる方向性、具体的には文豪といった表象などがサブカルチャー領域において注目を集めている。かつては確かにいた文豪という存在が、教養の補完といった意味合いではなく、所謂キャラクターとして注視され、そしてその中心的存在として夏目漱石はやはりいる。そうした動きは、戦国武将が現代的な表象として蘇っている状況などとも関連するのかもしれない。

夏目漱石研究は、いまどこに到達しつつあるのだろうか。一九八〇年代半ばに『こゝろ』をめぐって行われたいわゆる「こゝろ論争」を機縁とし、漱石研究は、近代文学研究の最新の方法が試され、議論される、活発なフォーラムとして機能していた。その最盛期を担ったのが、一九九三年から二〇〇五年まで発刊された、雑誌『漱石研究』だったことは間違いないだろう。しかし、雑誌の終刊に伴い、また近代文学研究における領域・方法の多様化と細分化に伴い、その後の漱石研究で何が問題にされているのかが見えにくくなってしまう。

本パネルでは、服部徹也氏、宮園美佳氏、神田祥子氏の三名を招き、現在の漱石研究に

おける問いとはいかなるものなのかを提示して頂く。後に漱石が「未成市街の廢墟」として回顧する『文学論』や、職業作家となる以前に書かれた『一夜』や『草枕』を論じ直すこと。それは単に漱石の年譜の穴を埋める、あるいは漱石文学に関する固定観念を書き換えるというだけにとどまらず、「未成」の段階ゆえになし得た（小説）への発想や挑戦の可能性をいまの時点から再考する契機となるだろう。

デイスカッサントには佐藤裕子氏に加わって頂く。漱石研究の現在を共有し、かつその先へと開いていくための方途について議論していきたい。

夏目金之助の「文学論」講義

——漱石出発期の背景

服部 徹也

東京帝国大学英文学科講師・夏目金之助の講義は、受講生たちにより丹念に書き留められたノートとして現存する。しかしながら、これらは従来研究されてこなかった。発表者は受講ノート群の検討により、英国留学中の思索と、帰国後の講義での試行錯誤、そして『文学論』出版という段階を経た漱石夏目金之助の文学理論が変容した過程を通時的に把握しようと試みてきた。とりわけ、出版に際しての加筆修正箇所を推定し、理論的変容過程と同時期の創作実践との相互作用を検討した。今回の発表では「吾輩は猫である」（第一回）、「倫敦塔」、「カーライル博物館」を書いた一九〇四年末から翌年初頭にかけて、すなわち作家・漱石出発期の背景で夏目金之助がどのような講義を行っていたかを、受講生のノートをもとに分析する。

なかでも、刊本『文学論』に収録されなかつ

た講義箇所では、「ドン・キホーテ」や『オセロ』等の比較を通して悲劇・喜劇の受容体験に共通するものが論じられていた。それは、「虚構」に魅せられる読者の心理についてである。受講ノートは当時の夏目金之助の関心と『文学論』生成の諸相を物語る資料であると同時に、漱石出発期に関する理解に新たな彩りを増してくれるはずである。

小説が断念される「場」

——夏目漱石「一夜」——

宮 菌 美 佳

夏目漱石「一夜」は、明治三十八年九月「中央公論」に掲載された。同時代評には、「近刊の『中央公論』にある夏目漱石の短篇「一夜」、読んで何のことやら更に分らず。」（『片々録』「早稲田学報」明治三十八年一〇月）に見られるように、「読んで分らない」との評が散見される。

「一夜」は、個人としての特性をほとんど持たない三人がとりとめもなく対峙する、ほ

んの一時共有された「場」を提示する作品である。読者は「一夜」を、記述内容や出来事の間は何らかの因果関係を見出そうとして読み進めることになる。ところが作品の最後で作者は、「三人の言語動作を通じて一貫した事件が発展せぬ？ 人生を書いたので小説をかいいたのでないから仕方がない。」と、作中の出来事に因果関係を持たせる意図があったことと、「小説」を書いたことを否定する。後に残るのは、読者が作中の記述内容や出来事に対して、何らかの因果関係を見出そうと試みた経験のみである。

「一夜」は、それゆえに、作者は因果関係のままざしの下に紙面に出来事を生成させているのだから、作者の想定した因果関係通りに、記述内容や出来事に因果関係を見出すのが、望ましい「小説」読者の態度である、といった、同時代に漠然と共有されている「小説」概念を逆照射し、その概念を批判する作品となっている。

漱石作品における「筋」と「興行」

神田祥子

漱石の創作初期において、作品全体を貫く事件の展開を時系列に沿って追う「筋」と、作品の部分的・断断的な鑑賞を可能にする「低徊趣味」や「断面的文学」は、相反する要素として捉えられつつも、様々なかたちでその共存が模索されている。この「コーザリティー（推移趣味）」と「エキステンション（低徊趣味）」の相克は、表現概念としての「画」と「詩」の互換性とも通底するものであり、「一夜」「草枕」などに見られるように、特に漱石が職業作家となる前の創作活動期においては、それが、自身が作品の主題ともなり得る大きな問題点でもあった。漱石は「筋」がより重視されがちな小説という媒体において、どれだけの「興行」を生み出し得るかに苦心を重ねた形跡がある。

しかしその後、職業作家となった漱石は長編連載小説という場において、「読者の注意を引きつける」（『文学雑話』）ための「筋」

や構成のあり方を新たに模索している。本発表では、この転換期にあたる明治四十年前後に注目し、「草枕」「坑夫」「虞美人草」「三四郎」と、それらをめぐる漱石の評論・談話の分析をまじえつつ、「筋」と「興行」のバランスがどのように取られていったかを検証する。またその過程において、造形芸術からの影響を強く受けて来た漱石の「エキステンション」にかかわる表現が、どのように変容したかを合わせて考察したい。

漱石という媒体

運営委員会

一九八〇年代、研究において漱石神話は劇的に解体された。それから時を経て、なお一人の作家を議論の共通の軸に据えるとは、どのようなことだろうか。この間、研究では、高度な批判性を目指して、一人の作家にこだわらない、多様な方法と複雑な言葉が生み出されてきた。一方、一般的な読書では、文学に、人としての経験が期待される場合も多く、読者層が広いほど、作家個人への注目も大きくなる。こうした感覚や現象は、研究の最先端とは乖離しているように見える。しかしながら実は、どこかで接続しているのではないだろうか。漱石は、あらためて両者の媒介を考える上での、刺戟的な題材であると言える。本シンポジウムでは特に、作家の執筆行為が、個別の身体と社会的歴史的制度を結び媒

体であるという点に注目したい。小説という外来の形式を日本に移入しなければならなかった漱石は、言語と慣れた身体のずれを、不調として、自らの身体器官や気分にも、作中人物間の齟齬にも、または語彙や文体選択のきしみとしても刻印することになった。それらのうち制御され得た部分は、享受者に対して、文章の書き方やもの見方までもコントロールする規範として機能したが、他方では、汲みつくせない違和感がテキストに保存され、読み手の側の社会的状況の変化に応じて、新たな顔をのぞかせるものでもあった。登壇者には、会員から北川扶生子氏、石原千秋氏、飯田祐子氏を、そしてゲストとして阿部公彦氏をお招きする。それぞれの観点から、漱石の〈書き方〉〈読み方〉〈読まれ方〉の具体相を論じていただき、規範の固定化と、読み方の柔軟な更新の双方を許容する、漱石テキストの強度の内実を検証したい。さらに、発表者の問題提起を受け、午前中のパネルをも視野に収めながら、立体的な議論の展開を目指す予定である。みなさまの積極的な参加をお願いしたい。

漱石を読む、漱石で書く

——(文)の転位と再構築

北川 扶生子

漱石テキストのイデオロギー的位置は様々に指摘されているが、漱石が小説に用いた言葉そのものが、多様な社会階層とどのような関係結び、どんなプロットを形成する動因となったのか、言葉が従来指示していた社会的文脈が漱石テキストのなかでどう転位し、総体としていかなる世界が再構築されているのか、その様相はいまだ明かではない。

言葉は場所の歴史を引きずっている。西洋近代から小説という概念を輸入した日本において、自国語で小説を書くためには、特定の社会集団や階級を含蓄する上に、それに対応するジャンルの約束事も発動させてしまう。語彙や文体を、どう扱うかという課題があった。

漱石は、社会的含意のある言葉同士を争わせ、本来の位相からずらすことで、小説の言葉に階層性を与え、様々な効果を生み出して

小説を動かす原動力といえる。たとえば『道草』。漱石自身の経験と重ねる読みを呼び込みつつ多重化した作品であるが、主人公の健三は、妻に、また養父の島田に「不愉快」を覚える。過去と現在とが結び合う感覚が重苦しさを帯びているのは、ともに「不愉快」なものであるからだ。健三だけではない、細君の気持ちのこじれもまた「不愉快」と表現されている。あちらこちらの関係の不具合の度に「不愉快」は発生している。『明暗』はそれまでの作品とはかなり質の異なる作品だが、それでもやはり「不愉快」は消えはしない。津田由雄もお延も「不愉快」を抱えている。お互いに対しても、吉川夫人や小林やお秀といった二人を取り巻く人々に対しても、しかし同時に、小説を書くことのなかには、あるいは小説として書かれたことのなかには、「不愉快」ではないものも潜んでいるはずである。あるいは「不愉快」とともに、そうではない時間も流れていたのではないだろうか。本発表では、明示された「不愉快」とともに、そうでないものについて考えてみたい。

加えて、もう一つ鍵語として取り出してみ

たいのは「弁解」である。これもまた漱石が度々使っている語である。『道草』にも『明暗』にも用例がある。とくに印象深いのは『道草』の「自分を細君に説明しやうと力めなかつた彼も、独りで弁解の言葉を繰り返す事は忘れなかつた」という箇所である。健三の弁解は「独り」でするものでありながら、宛先を持っている。「弁解」という行為のちぐはぐさは、「不愉快」という関係の不具合の語りとして読むことができる。そしてその「弁解」は、小説の語りへ「月の暈の様に」「はみだして」はいないだろうか。「不愉快」と「弁解」を糸口にして、漱石テクストにおける「語りにくさ」について考えてみたいと思う。

漱石作品とおなかの具合

阿部 公彦

夏目漱石の胃弱は有名で、伝記的なアプローチでも必ずと言っていいほど言及されてきた。神経衰弱とならび、彼の食べ物とのつきあい方には明瞭に個性がある。しかし、作

品の読解となったとき、胃腸問題はどれくらいかわってくるだろう。本発表では、あらためて漱石の作品にひそむ潜在的な「胃弱」性に注目してみたい。彼の作品に見られるある種の特徴を、「胃弱」という観点から理解できないか。

そこで一つヒントにしたいのが「むかつき」の問題である。「むかつき」に焦点をあてた研究はまだそれほど多いとは言えないが、現代人が日常生活においてもっとも多く口にしているのが「むかつき」「きもい」といった消化器系の不快感にかかわる表現だということは意味深い。英語圏でも、*disgust* という表現を美学的、倫理的、政治的な比喩として広く用いる傾向が見られる。このような事態は、ここ数十年の感受性の方向の変化と密接にかかわっているように思える。私たちは以前にも増して周囲の世界と、「胃腸的な感性」を通してかかわるようになってきたのではないだろうか。

こうした傾向をさかのぼると、その起源の一つとして漱石の作品にたどりつくのではないかとというのが筆者の考えである。むろん漱石作品の登場人物たちには「ちよーキモい！」

などという発言はない。しかし、問題を腹にかかえたまま他者と切り結ぶ人物たちの構えをはじめとして、胃部不快感を汎用性の高い隠喩として活用しながら世界とかわり、理解し、受け入れようとする姿勢は随所に確認することができそうだ。

こうした考察から出発すると、日本における近代小説や近代個人主義の成熟が、胃腸的な感性和密接にかかわりあっているのではないかという考えにも思いが及ぶ。むしろ、それは日本独自の問題ともいきれない、近代社会全体の宿命なのかもしれない。

入会手続き・会費納入等についてのご案内

○入・退会の手続き、住所・所属などの変更、その他会員としての通知や連絡は、左記の特定非営利活動法人「お茶の文学術事業会」日本近代文学会係宛にお願いいたします。

○入会の場合は、お茶の文学術事業会へ連絡すると申込書が送られてきます。入会届に記載する推薦人の姓名は必ず、自署でお願いいたします。

○退会の場合は、その旨を葉書でお届けください。

特定非営利活動法人・お茶の文学術事業会

「日本近代文学会」係

〒112-8610 東京都文京区大塚二―1―1

お茶の水女子大学 理学部三号館二〇四号室

電話・ファックス 〇三(五九七六)一四七八

メールアドレス anjis-info@npo-ochanomizu.org

○会費、機関誌購入代金などは、左記の郵便振替口座にお振込みください。

記号・番号 00140-1-260401

加入者名 日本近代文学会